

Hemingway :

“Code”とそのAftermath

—— 初期の作品から *Islands in*

*the Stream*へ ——

丸 田 明 生

この小論では、Hemingwayの“Code”とは何か、それはHemingwayの中でどのように形成され、発展したか、そして最後に、その“code”はどのような意味を持つか、を考えてみたい。

(1)

Winner Take Nothing (1933) 中の一短篇 “A Natural History of the Dead” の中で、重傷者を放置した軍医に、それを見かねた負傷者の一将校が、自分が射殺して苦痛を早く終わらせてやると興奮し立ち上がると、軍医はヨードチンキの皿を投げつけ、眼つぶしを喰わせる場面がある。そこへその重傷者が死んだという報せが来るのだが、将校は「よくも盲にしたな」(‘You’ve blinded me!’)とわめくのだが、軍医は、「苦痛がひどいのだ。ジッとおさえておけ」(‘He is much pain. Hold him very tight.’)と従卒に命じる。Philip Young は、この軍医の言葉、‘Hold him tight’をとり上げて、この「もちこたえる努力」が、Hemingwayの“Code”の出発点であると言っている。(……the effort to hold tight developed into what is known as the Hemingway “Code.”¹⁾) 又、Rovitは“Code”を二つに分類し、その一つは「なすべからざること」

(“Thou shalt not’s”) を守ることであり、具体的に言えば、「hunter が走っている車から獲物を射つべきではないとか、兵隊は上官の命令が如何に馬鹿げていてもそれに服従すべきであるとか、賭博者は彼を射つた者を警察に告げるべきではない」 (The hunter does not shoot at game from moving vehicles; the gambler does not tell the police who shot him; the soldier does not disobey even when he is convinced that his superior officers are stupid. ²⁾) とかいう例を挙げ、これを “sportsman’s code” と呼び、Hemingwayの本質的な“code”はこれではなくて、「人間のよろきに立ち向かい、それを征服することによって“honor”とか“dignity”に至るプロセスを言うのである」 (The code which does concern Hemingway and his tyros is the process of learning how to make one’s passive vulnerability (to the dangers and unpredictabilities of life) into a strong, rather than a weak position, and how to exact the maximum amount of reward (“honor”, “dignity”) out of these encounters. ³⁾) と言っている。

RovitもHemingwayの“sportsman’s code”を否定しているわけではない。それ故にこの“code”はHemingwayの“minor code”と呼んで然るべきであろう。そして、これら二人の批評家によるHemingway“code”についての解釈は、一応convincingなものであると思われるが、Hemingway自身が、*Torrents of Spring* (1926)の中で述べている次の言葉が、彼の“code”と呼ばれるものの本質をかなり明確に表わしていると思われるので、それを引用して“code”の本質論についてのピリオドを打つことにしたい。

戦争における立派な兵士というものは、次のようなプロセスがあるものです。まず最初はとても勇敢です。なぜなら何物にも打ちのめされたりはしないと思うからであり、自分だけは何か特別なものであり、自分が死ぬというようなことは決してないと思込んでいるからだ、それからどうもそうでないことに気づく。そうやって本当に恐ろしくなる。そ

れでも立派な兵士なら、前と同じように任務を果していく。それから次に死を免れはしたが、ひどい傷を受けてみると、自分のあとからやってくる新兵どもが、かつての自分と同じことをやっているのを見ながら、しごく冷徹にかまえるようになり、そして立派なハードボイルドな兵士になる。」

(In a good soldier in the war it went like this: First, you were brave because you didn't think anything could hit you, because you yourself were something special, and you knew that you could never die. Then you found out difficult. You were really scared then; but if you were a good soldier you functioned the same as before. Then after you were wounded and not killed, with new men coming on, and going through your old processes, you hardened and became a good hard-boiled soldier. — *Torrents of Spring*, p. 72, Penguin Books)

ところで、このHemingwayのprincipal “code” である「耐える力」は何に由来するか、私はそれを「フロンティアの遺産」とみたいのである。アメリカ中部の中流階級の家庭に育ったHemingwayには、父祖伝来の先天的とも言えるフロンティアの資質と、又後天的には少年時代彼の両親を始め、彼を取り巻く環境から、自然にある程度の“frontier spirit”が醸成されていたものと思われる。それと同時に、感受性の強い彼には、インディアンとの接触によって知った“Indian Camp”に描かれているようなviolenceの世界、“The Doctor and the Doctor's wife”の中の父と母の葛藤、又“Ten Indians”や“The End of Something”にみられる恋の苦い苦しみなどで、世の中と人生の実体にinitiateしつつあったわけである。

折しも第一次大戦が起こると、彼は更に多く、つぶさに現実を見極めんがために、そして自分の中にある“frontier”を試さんがために——これは彼にとってはそういった意識は持っていなかったであろうが——そ

れに身を投じたのであった。しかし、彼がそこに見たものは、予想をはるかに越えた巨大な戦争の暴虚であり、その中で崩れゆかんとする自己の自信と自負の正体であった。そうして彼は、我々が *A Farewell to Arms* や "In Another Country" や "Soldier's Home" にみる如く、「もう戦争なんか真っ平だ」と "separate peace" を宣言する主人公になるのである。

しかし、それ故にこれら上記の作品において、主人公が戦争の悪魔的暴虚のために打ちひしがれ、打ちめされて、完全に messy な人間になり下っていくかというとは決してそうではないのは今更言うまでもない。彼等は虫けらのように死んでいく運命に身をまかせるほどあっさりとはフロンティア・スピリットを捨てる人間ではない。例えば "In Another Country" では、一旦は若い奥さんを失なって、「私はあきらめられんだ」 (I cannot resign myself.) と女々しさを見せた major が、「軍人らしい歩き振りで、両頬に涙をため、唇をかんで、戸口から出ていく」 (……carrying himself straight and soldierly, with tears on both his cheeks and biting his lips, he walked……out the door.) 姿に、Hemingway Hero は、——Hemingway Hero というのは、作者自身の投影と考えられる、"code" を執拗に追求する Hemingway の全作品中の主人公——何か彼にとって重要なものを学んでいるのは明らかであるし、major が、イタリヤ語を「文法的に話さなきゃいかん」 ('speak grammatically!') という時にも、その規範に忠実に従おうと主人公は自身に言いきかせているのである。一見虚無的と言われている *A Farewell to Arms* においても、第一章の最後の文である「コレラで死んだのはたった七千人だった」 (……and only seven thousand died of it in the army.) の中に、既に我々は彼の stoicism の並々ならぬ姿勢をありありと汲みとることができるのであり、又この作品のエピローグに印象的に置かれている、よく引用される「しばらくして私は外に出て病院をあとにし、雨の中をホテルへ歩いて戻った」 (After a while I went out and left the hospital and walked back to the hotel in the

the rain.) では、作者が、この非情な現実に、非情に耐える決意を極めて効果的に押し出していると思うのである。

*A Farewell to Arms*で、主人公の Frederick Henry が、タリアメント川に飛び込んで銃殺を免がれ、“separate peace”を宣言することも、裏を返せば彼の“stoicism”と矛盾するものではないと思われる。運命とあきらめて、銃殺の下にあえなく滅びゆくことは、彼には耐えられない自己否定なのである。スイスへの逃亡は、自己の崩壊と消滅を防ぐ“self-defence”の手段でもあったのであり、それは Hemingway が、アメリカ小説の源と激賞した Huckleberry Fin の逃亡と性質を同じくするものであり、又いわゆる西部の英雄の伝統を受け継ぐものであったことに気付くのである。そのように考えてみると、Hemingway は彼の作品の中で、非常に多くの逃亡をえがいているのを発見する。さきに言及した“Soldier’s Home”の主人公 Krebs も母親から逃げ出しているし、“Big Two-Hearted River”も現実からの逃亡と再生への決意の物語と言えるし、“The Killers”は勿論のこと、“The Snows of Kilimanjaro”など、逃亡は数多く描かれている。

そしてこのような逃亡は、始めに述べたように「フロンティア」と関係すると考えられる。それは、何よりも先ず、アメリカにおいて community が、人々が西部に移動するにつれて分解し、個人主義を養成し、人々がコミュニティよりも個人に注意を向ける傾向を養ったことに由来する特性の一つだと考えるのである。そしてその個人主義は、社会的グループと個人とは相入れないという観念を生むのであって、それ故、この社会からの脱出、逃亡への志向が生まれ、地理的フロンティアは、アメリカにおいては少なくとも、その脱出のスペースを持っていたのであった。我々は、夕陽を浴びてロッキー山脈の彼方に消えて行く西部の男の中にその象徴を見るのである。

しかし、逃亡は逃避ではない。この西部の英雄の行く手には荒野が待ち受けている。そしてこの荒野との接触が、きびしい訓練に立派に耐える自己の養成を必要とし、激しい行動力と知覚力を与えることになるの

である。

植草甚一氏は、「西部伝説の英雄たち」という論文の中で、ロバート・ワーショウが評論集「直接的経験」で述べている西部の英雄についての考察を次の如く紹介している⁴⁾。

西部劇の英雄も孤独な印象を与えるし、メランコリーな人間だということでギャングスターと共通している。だが、その孤独性は、ギャングスターのように外部との接触から生まれてくるものではなく、敵を倒さねばならないが、それにはどこまで拳銃の腕さばきが上達しているだろうか、という自分自身に向けられた孤独性なのだ。

このどこまで拳銃の腕さばきが上達しているか、という西部の英雄の自己に向けられた孤独性が、Hemingway においては、「どこまで耐えられるか」という自己に向けられた孤独性となって表われていると思うのであり、それが、又Hemingway "code" なのであって、我々はその孤独の中に耐える典型を、“The Killers”のOle Andersonや、“The Gambler, the Nun and the Radio”のCayetanoや、“A clean, Well-Lighted Place”の老人にみるのできるのである。勿論Hemingway の場合、拳銃の腕さばきは自己の肉体の強さにとって代わってはいるが、その「内面志向性」においては、又社会に組み入れられることを嫌う徹底個人主義、それ故に起こる社会からの逃亡において、そしてその孤独において、“Hemingway hero”と西部の英雄との間には著しい類似があると考えられるのである。

ところで、西部に住む男たちが全て所謂西部の英雄というわけでは勿論ない。西部の平均的男性達は、普通東部から教養ある淑女と思われる女性達がやって来ると、今まで相手にしていた娼婦たちを棄てて、彼女等との間に真の愛を見出し、多くは結婚し、それと共に男の方は西部魂を失なって普通の人間となっていったのではないかと思われる。この点を少し、“Hemingway hero”の場合について考察してみたい。

Hemingway が特に短篇で取扱った男女は殆どうまくみ合わない。その発端は、“The Doctor and the Doctor's Wife”に始まり、“Mr. and Mrs. Eliot,” “A Cat in the Rain,” “Hills Like White Elephant,”

“Out of Season,”更に“A Short Happy Life of Francis Macomber,”
 “The Snows of Kilimanjaro”など、極めて多くの作品で、男女の間の
 乖離と葛藤が、不調和音のようにアイロニーの中にはじき出されている。
 しかしこれらの男女の関係を、作者は客観的な感受性をもって描きなが
 らも、最後には、その縄の糸を断ち切って、その束縛から解放され、
 自己の自由と主体性の確保を打ち出している⁵⁾。“Cross-Country
 Snow”や、“The Snows of Kilimanjaro”においては、いわゆる東部の
 女性の支配を断ち切って、自由と孤高を選ぶ主人公の西部の英雄的姿が
 特に顕著である。このような対女性との問題も、Hemingwayの“code”
 形成には一翼を担っているものとして注意すべき事柄と思われるし、そ
 してそれがやがて彼の将来において重要な意味を持つことになるのであ
 る。

さて、Hemingwayの“code”に、いわゆる“sportsman’s code”とも
 言うべきものがあるということは既に触れたことであるが、この点につ
 いて今少し考えてみたい。「汝すべからず」といったようなもの、即ち、
 ハンターは走っている車から射つべきでないとか、手負いのライオンを
 そのままにしておくべきではないとか、自分の臆病さを人に言わないで
 欲しいなどと頼むべきではない、とか言うような“A Short Happy
 Life of Francis Macomber”の中での例などがそれである。勿論これ
 は西部の英雄達にも見られる。西部の英雄達は、gangsterのように、気
 に入った女ならどんな手段を使ってもものにするようなことはしない。
 彼等と彼等が愛する女との間には距離が存在する。彼等西部の男達には、
 人間をして人間たらしめるものがある、いわゆる規範意識がある。彼等
 のもつこの“code”は、社会の作ったモラルとは違う。個人の持つモラル
 である。一人荒野に立つfrontier’s manに、人間としての誇りを持たせ
 るためのモラルである。“A Clean, Well-Lighted Place”の若い方の給
 仕や、*The Sun Also Rises*のRobert Cohnや、*The Old Man and
 the Sea*の、骨ばかりのmarlinを見て、勝手な推量をする観光客などは、
 こういうモラル、いわゆる“code”を持たないものとしてHemingway

は軽べつしている。

ところで、この種のcode, いわゆるHemingwayの“secondary code”をHemingwayはどこから得たか。それは、Cooperが、その一連の作品を通して描いている、物欲と利己心で荒野をあらしていく者共に対するキリスト者的資性ではないかと思われる。あるいは広く、神を意識した人間の、人間の教養と言ってもよいかも知れない。鹿狩人が、食物や衣服が不足した時を除けば、決して雄鹿や雌鹿を射たなかったのと同じく、*The Old Man and the Sea*においてもサンチャゴは、fishermanであるための殺戮の宿命を痛切に意識させられて罪の意識に苦しんでいる。Hemingwayの主人公達は、物質文明の管理社会の中で解体せんとする自我を、この二つの“code”の鎧で包み、荒野の英雄の牙城をしっかりと守って、その道徳律を貫こうとしたように思えるのである。

(2)

それではYoungの言う“Hemingway hero”と“code hero”との関係⁶⁾の中で、その二者がどのような関係となって進んでいったかを次に考えてみることにする。——但し、前半については拙論 [Hemingwayにおける体験と文学の間 (1～5)] に詳しく述べているので、ここではその部分は簡単に“code”に関係する部分について触れるにとどめる——。

“Indian Camp”のNickが、インディアンの自殺を見た時にした「生き抜こう」(…he felt quite sure that he would never die.) という決心を初めとし、“The Battler”のAd Francisや、“The Undeclared”のMannuel Garciaや、“Fifty Grand”のJack等は皆“Hemingway hero”にとってはtutorの役目をする“code hero”である。そして“Hemingway hero”は、これを必死にemulateしようとするのである。そうした中で、“Hemingway hero”は大抵何かをつかみ出す。それは“code hero”によって前者が何かを学びとるといふ形をとる場合が多いのだが、例えば、“Big Two-Hearted River”のNickのように、そういう“code hero”がない場合でも、自分を取巻く世界の暴虐に敗北し、屈従するのではな

く、それに立ち向かい、平然と耐え、人間を人間たらしめるある規範意識を自らに課することによって、自己を高揚させようとする態度をもっている。

しかし“code hero”といえども絶対的な意味での勝利者ではない。彼等は死やひどい挫折にいつも見舞われる。“A Clean Well-Lighted Place”のたっぶり金を持っているにも拘らず自殺しようとした老人や、Mannellの悲惨な死、“The Gambler, the Nun, and the Radio”の虚無の幻影や、“A Natural History of the Dead”での近代戦の戦場の縮図、腐乱しかけた死体の自然作用をつぶさに見せつけられた“Hemingway hero”は、更に深く絶望の深淵にはまり込んでいったものと思われる。そして“A Clean, Well-Lighted Place”の中年のwaiterは、このようなHemingwayのNadaの心境をつぶさに伝えるものである。

“Hemingway hero”は、*The Sun Also Rises* や、又後期の短篇一主として*Winner Take Nothing* に収められている一に見られるrealisticな、或は傍観者的な態度、そして、彼自身の反応で言えば、それらの世界にじっと耐える態度を捨てて、“A Short Happy Life of Francis Macomber”や、“The Snows of Kilimanjaro”では、勇敢に立ち上ろうとした。彼はこれら二つの作品では、“code hero”と“Hemingway hero”との合一を果たさんがために敢然と挑み始めるのである。これら二つの作品は、一言で言えば、自己のめざす理想像への大いなる飛躍であり、挑戦である。そしてその目的は、まさに達せられんとしていた。彼は、自らを“code hero”たらしめるべく「まどい」と「弱さ」から、一気に大空への悲壮な飛躍を試みたのであった。それは勿論これまでの長い忍耐と試練の蓄積があった結果であることは言うまでもない。

しかし、“Hemingway hero”は、“code”を握みかけた瞬間、はっと我にかえったのではなからうか。彼が“code”を体得することによって崩壊から自己を護ったその自己は、それでは何を指すべきなのか、何をなすべきなのかと。そこで彼の目は社会に向けられたのである。折し

も、ウォール街の大恐慌などで社会問題がアメリカ中を吹き荒れていた。彼はそこで“code”で武装した自己を社会の中で試めさんとしたのである。それが *To Have and Have Not* である。たしかにこの作品では失業者の惨めな状態に indignation を燃やしてはいる。しかし、結果的にはそれ以上は出なかった。Harry の言う「一人では何も出来ない」(“No matter how a man alone ain't got no bloody fling chance.”) という言葉も、Harry の妻の Marie が最終章で言う、「この糞面白くもない世の中」(“...in this goddamned life.”) という言葉でやはり虚無のトーンに引き戻される。そしてそのことは、全体と個人との間に揺れ動く作者の状態を示しているとも言えるのである。

しかし、遂に“Hemingway hero”は、*For Whom the Bell Tolls* において、その働き場所を見出したように思われる。“code hero”と“Hemingway hero”のおおよその合一を見た時、そして自己の存在を他の中によく確認することのできた hero にとって、最終章の「この世界は戦うに価するところ」(The world is a fine place and worth the fighting for ...) となったのである。かつて *A Farewell to Arms* で“separate peace”を宣言した hero は、殺し合いの矛盾に悩みながらも、今は水を得た魚のように生き生きとして生き、喜んで死地に赴くのである。そして、今まで身をまもるためのものであった code は、やや違った色合いを帯び始め、やや積極的な“duty”へと変化していくのである。勿論、*For Whom the Bell Tolls* の中にも Royalist の陣営が行なった暴行や、Jordan の死そのものによって象徴される否定のアンダートーンは生き続けている。しかし作品全体から受けるものは、Harry の「一人では何もできない」よりも、「この世界は戦うに価するところ」の方が、はるかに肯定の実感を伴うのである。そして、その実感のバックボーンが、この“duty”に外ならない。「人は彼に出来ることをしなければならぬ」(You can do nothing for yourself but perhaps you can do something for another.) という Jordan は、ゲリラの幾人かとの連帯の中に、一人立ちを始めたということなのである。彼が「人

は他人のために彼に出来ることをしなければならない」という時、それは彼が、それをなし得る自信をもって来たからであり、その自信はやがてあの *The Old Man and the Sea* のあの力強さへと発展していくものなのであった。*The Old Man and the Sea* においても、彼の宇宙感 は shark に喰われた marlin によって象徴される如くやはり変わってはいない。しかし Santiago 老人は、貧しい孤独な老人ではあるが、その精神の偉大さにより、読者は巨人の如き印象を与えられ、Santiago 老人は “code hero” の色合いをいよいよ濃くすると共に、今度は今までの “Hemingway hero” は apprentice としての少年にその位置を譲っているのである。ここに長い “Hemingway hero” の自己完成は達成され、“code” は完全に自分のものとなったわけである。そしてその code は、*Death in the Afternoon* において、Hemingway の語る闘牛の美学である。それは闘牛士が終わりに近い段階において始終感じ、且つ見物人に伝達する不滅の感情である。そしてそれは、この *The Old Man and the Sea* において、その “code” は、不滅感は、まさに完成していると言えるのではあるまいか。

(3)

しかし、ある物が獲得されれば、ある物が失なわれるのはエネルギー保存の法則を待つまでもない。このような徹底個人主義は、善悪両面に作用する。“Ten Indians” は、インディアンの少女 Prudence の裏切りによる “Hemingway hero” Nick の失恋の物語であるが、その中に、Nick が乗せてもらっている荷馬車の持ち主、Joe Garner と、そのおかみさんの描写がある。農夫の Joe とおかみさんの睦みは、父一人が待つ Nick の別荘や、“The Doctor and the Doctor’s Wife” に描かれたこの中産階級の夫婦の心の疎隔とは極めて対照的である。

Garner 夫妻は、お互いの言葉こそ乱暴であり、粗野ではあるが、その間には実に暖かい情愛が溢れているのを Hemingway は見事に描いている。“Now I Lay Me” の中では、負傷して眠れない主人公は、年輩

兵隊のJohnと仲よしになるのだが、彼は盛んに主人公に結婚を勧めている。それは「In Another Country」で、Majorが、「男は結婚してはならない。それはすべてを失なうからだ」(A man must marry. ...He'll lose it (= everything) という言葉と、はっきりしたコントラストをなしている。DoctorとDoctorのwifeに対するGarner夫婦、majorに対するJohnの関係は、一方は自我と主体性、それに伴うdignityにおいて勝り、他方はほのぼのとした心の結びつきにおいて勝る。Hemingwayのその対照の描き方は実に見事である。少佐の言う「すべてを失なうからだ」という言葉は、「自分を失なう」、「self」を失なう、ということであり、Hemingwayの“code”の目標とそれとは油と水のように相容れないものなのである。Hemingwayが短篇で扱った男女は、Garner夫婦などの例外を除いては、殆どこの“self”が、相手の“self”とぶつかり、傷つき合い、やがて二人がバラバラになる前兆をのぞかせている。この強い自我を持つ主人公の相手が、男に従順で、献身的な、彼の長篇に現われるheroine達のような女性であれば、これらの短篇におけるようなストーリーは出来あがらないであろう。多くは彼の実生活と深いかわりを持つかに見えるこれら短篇のheroine達は皆アメリカの女であり、長篇に現われるイギリスやスペインやイタリーの女性ではなかったことは注目すべきことであろう。アメリカにおける女性の人権の高さや、それによっておこる個性の強さが、Hemingwayの主人公の生き方と相容れなかったからであろう。そういう意味でHemingwayの本質は、いわゆる近代女性のそれとは合わない面があったのである。

自己の空間の確保にひたすら専念した“Hemingway hero”であつてみれば、その目的達成のためには、障害となるものは非情にも抹殺しなければならなかった。彼はその刃を、あからさまに人間に向けることはしなかった。それは、スポーツの中であり、又動物などに対してであつたが、それでも人間を含めて多くのものを傷つけていた。そうすることによって残されたものは“code”と“dignity”に輝いてはいるが、淋しい、悲愴感をたたえる、とも言えるGiantであつた。如何に“code”人

間とは言え、彼も又人間である。妻もなく、子供も失なった“Hemingway hero”の嘆きは、*Across the River into the Trees*に至って、はっきりとした形をとって表われてくる。三度も結婚に破れ、三度も負傷し、今は心臓がひどく悪く、薬を手放せない独身のCantwell 大佐は、Renata との恋愛も、今迄の長篇中のそれのように穂りをもたらししていないように思われる。やはり、彼は既に自分の“code wound”を癒してくれる女性を、この世界に見出すことのできない寂しい年令に入ってしまったことを意味している。そして*The Old Man and the Sea*では、もはや女性は登場して来なくなるのである。彼の“code wound”を癒してくれる「明るく、照明の行き届いた場所」は、ここでは、海であり、魚であり、ライオンの夢であり、少年であると言えるであろう。

Hemingway の作品に、最初から自然がlyricalに描かれ、魚やバッターが人間と同じレベルに持ち上げられてHemingway hero の友となっていることは誰も指摘しているところである。それらは既に考察してきたように、この“code”の試練の背景であり、苦悩のつぐないでもあったのである。“code”のあるところに、必ず闘いがあり、生命の強烈な燃焼があり、それらがあるところに必ず傷があった。そしてその傷があるところには、それを癒す薬があり、場所がなければならなかった。それが自然であり、長篇に現われた献身的な美女達であった。そしてその美女達が姿を消してしまった今、それらに代わるものは“La mur”なる海となったのである。

(4)

The Old Man and the Sea は、Hemingway が最初計画していた「陸・海・空」の三部作の中の「海」の中で、更にその一部をとり出して、外の「若き海」(*The Sea When Young*)、「不在の海」(*The Sea When Absent*)などに先立って発表された「存在の海」(*The Sea in Being*)と最初名付けられていたものであったという⁷⁾。我々は、*The Old Man and the Sea* の中に、まとまり過ぎていると言える“code”

の燃焼をみるように思えるけれども、彼の死後発表されたその「海」の残部とも言える *Inlands in the Stream* を読む時に、*Across the River and into the Trees* でその一角をのぞかせ始めていた "code" の裏側をまざまざとうかがう気持ちがするのである。そこには彼の "code" 人間の終焉が余すところなく描かれているからである。今、その一部を少し詳しくとり出してみよう。

先ず第一に、*Islands in the Stream* の主人公 Thomas Hudson は、老人になった今、若い時別れた妻のことをしきりに思い出し、彼女と別れるべきでなかったとしみじみと回想し、彼女や次の女性に対しても苛酷であった自分に罪の意識を感じ、それは自分のわがままであったと反省するまでになっている。そして子供達と一緒に住めない孤独の自分の愚かさを不甲斐なく思うのである。この作品の一番重要なポイントはこのことにあると思う。

But why did I ever leave Tom's mother in the first place? You'd better not think about that, he told himself. That is one thing you had better not think about. And these are fine children that you got from the other one. Very strange and very complicated and you know how of their good qualities come from her. She is a fine woman and you never should have left her either. Then he said to himself, yes, I had to.

But he did not worry much about any of it. He had long ago ceased to worry and he had exorcized guilt with work in so far as he could, and all he cared about now was that the boys were coming over and that they should have a good summer. Then he go back to work. (*Islands in the stream*, p. 4, Penguin Books)

更に彼の調子は悲哀を帯びてくる。

He knew almost what there is to know about living alone and he had known what it is to live with someone that you loved and

that loved you. He had always loved his children but he had never before realized how much he loved them and how bad it was that he did not live with them. He wished that he had them always and that he was married to Tom's mother. (ibid, p. 84)

HudsonはTomの母である最初の妻と別れたことを繰り返し後悔し、せいぜい子供達が来てくれることで満足しようと努力しているのである。更に今一つ引用してみよう。

He did not even mind being awake now and remembered how it had been once when he had not been able to sleep and had lain in the night thinking about how he had lost the three boys and the fool he had been. He had thought how he had done things because he could not help them, or thought he could not help them, and had moved from one disastrous error of judgment to another that was worse. Now he accepted that as past and he was through with remorse. He had been a fool and he did not like fools. But that was over now and the boys were here and they loved him and he loved them. He would let it go at that for now. (ibid, p. 85)

しかし、第二の点としてこの作品の中で、往年のHemingway “code” が消えてなくなっているわけではない。そこには*The Old Man and the Sea*のmini版とも言うべきものが存在している。Hudsonが息子のDavidに魚との格闘の手ほどきをしているところがそれである。

‘Papa, do you think he can really stay with this fish?’
Tom said to his father very softly. ‘It’s an awful lot of fish for him.’ (ibid, p. 100)

これはDavidの兄Tomが父に尋ねる場面である。Hudsonは答えて言

う。

…But please know I would have stopped this long ago except that I know that if David catches this fish he'll have something inside for all his life and it will make everything else easier.

(ibid, p.115)

そして、結局最後にHudsonの到着した境地は、人間にとって“pride”が第一義的なものだが、人間は頭を使い、心を配って、その「誇り」を環境と調和させることが、必要なのではないかということであった。

Thanks for telling me,’ Thomas Hudson said. ‘I feel fuckall discouraged about things sometimes.’

‘Tom,’ Ara said, ‘All a man has is pride. Sometimes you have it so much it is a sin. We have all done things for pride that we knew were impossible. We didn’t care. But a man must implement his pride with intelligence and care. Now that you have ceased to be careful of yourself I must ask you to be, please. For us and for the ship.’ (ibid, p.312)

しかし、その反省もHudsonにとっては既に遅かった。子供達もその中にみんな死んでしまい、彼には“duty”にしがみつ়くことによってしか自己の存在意識を納得させるものはなくなったのである。疲れ果てたHudsonは次のように思う。

I am really fired finally, he thought. Well, I know what I have to do, so it is simple. Duty is a wonderful thing. I do not know what I would have done without duty since young Tom died. You could have done something useful. Maybe, he thought, Duty is simpler. (ibid, p.363)

そして、次の言葉はそれらの総括である。

Get it straight. Your boy you lose. Love you lose. Honor has gone for a long time. Duty you do. (ibid, p. 287)

しかし、あくまでもこの作品のベースをなしているものは、最初の妻と別れ、子供達も失ない、孤独の中に眠られぬ夜に夢みる“good old days”の思い出である。それを最後に二つ引用してみたい。

While Thomas Hudson was asleep he dreamed that his son Tom was not dead and that the other boys were all right and that the war was over. He dreamed that Tom's mother was sleeping with him and she was sleeping on top of him, as she liked to do sometimes. He felt all of this and the tangibility of her legs against his mouth. Her hair hung down and lay heavy and silky on his eyes and on his cheeks and he turned his lips away from her searching ones and took the hair in his mouth and held it. Then with one hand he moistened... (ibid, p. 299)

又、パリ時代の思い出は、

What were the happiest times ? he thought. They were all happy, really, in the times of innocence and the lack of useless money and still being able to work and eat. A bicycle was more fun than a motorcar. You saw things better and it kept you in good shape and coming home after you had ridden in the Bios you would coast down on the Champs Elysees well past the Rond Point and when you looked back to see what was behind you there, with the traffic moving in two streams, there rose the high grey of the great arch against dusk. (ibid, p. 389)

(5)

絶えず生と死に挟まれて生きている人間は果してしあわせであろうか。己れを一人疎外して社会と対決するのが、アメリカ人の、そしてその典型としてのHemingwayの生き方であった。個人の偉大さや、尊厳を求めることはなるほど魅力あることではある。しかし、それも度を過ぎると欲望を満たす手段となる危険をはらんでおり、他を傷つけ、社会的生物たる人間の存在と相容れないことになる。Hudsonの孤独、即ち“Hemingway hero”の晩年の孤独と寂寥はそこにあったのではあるまいか。名与と過去の栄光もその孤独や虚無を癒してはくれない。今の彼にとって自己の存在の認識は、もはや義務にしがみつくことのみであり、その義務感も死への誘惑にだんだんと隅へ追いやられていく。

人間とは、哀れな存在である。何故なら、この偉大へと向かう志向をセーブすることが極めて困難な動物でもあるからである。人との調和と協調の中に偉大へ向かう志向、偉大と欲望とが手を携えるのではなく、偉大と協調が手を携えることは出来ないものだろうか。個人が活動するスペースは、この地球上では極めて限られてきており、もはやアメリカにも、その他の国にもフロンティアは存在しない。“Hemingway hero”は、いわば最後の西部の英雄であったとも言えるであろうが、徳川時代やローマ時代が長い間続いたことも、法と秩序が固く守られたからであるとも言えるであろう。我々は一匹狼の劇的な生と死が、必ずしも幸せをもたらすものでなく、秩序に守られた安らかな生と死こそ、大多数の人間からみた場合幸せな生であり、死であったと思われるものに真の幸せがあり、又文学があるのではないか、ということも試みられ、探究されなければならないと思う。Hemingwayの文学は、その意味において我々に反省の材料を与えてくれる。Hemingwayの主人公は、カボーの言う、「最終的な調和よりも疎外と無秩序に惹きつけられた、さまざまの相貌をもった対立の中でもがき苦しむ」⁸⁾アメリカの主人公であった。民主主義とは、「忠誠を誓うこともなく、隷属することもなく、

臣下の身分になる必要のない、孤独な人間の世界である」⁹⁾という、トックヴィルの言葉も又、アメリカ小説の主人公、アメリカ人、ひいては極めてアメリカ的な戦後の日本人にも当てはまる。そして、既に Faulkner や Robert Warren には、この北部的民主主義に対立するものが見られるように思われる。昔の秩序への、統一された社会への回帰とでも言うものが——。T. S. Eliot は、秩序と、宗教を求めてイギリスへ去って行ったのである。 (1972, 10. 30)

Notes

- 1) Philip Young, *Ernest Hemingway* (G. Bell & Sons Ltd., London), p. 28
- 2) Earl Rovit, *Ernest Hemingway* (Twayne's United States Author's Series), p. 108
- 3) *ibid.* p. 109
- 4) 講座アメリカの文化「フロンティアの意味」p. 287
- 5) この詳細については拙論「Hemingway における体験と文学の間」を参照されたい。
- 6) Philip Young, *Ernest Hemingway*, p. 36
- 7) Carlos Baker, *A Life Story*, p. 488
- 8) ジャック・カポー、寺門 外訳「喪われた大草原」、p. 23, 太陽社
- 9) 同上, 同頁